

Title	満文『詩経国風』における押韻について
Author	山崎, 雅人
Citation	人文研究. 51 卷 8 号, p.81-107.
Issue Date	1999-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部 紀要
第51巻 第8分冊 1999年81頁～107頁

満文『詩経国風』における 押韻について

山 崎 雅 人

1 はじめに

『詩経』は五経のひとつとして聖典視され、漢民族の精神の顕れである詩文の根源と見なされ広く受容されてきた。清朝を建てた満州族も、アジアの文字を有する周辺諸民族の例に漏れず、先進的な漢文化を受け入れるために多くの漢籍の翻訳に力を注いだ。精神文化の具現である文学作品も対象から外れることはなく、『詩経』は早くに翻訳されたもののひとつである。翻訳の成立と受容は必ずしも同一視しえないとはいえ、このような規模の著名な文献が御製序を冠して訳される以上、翻訳側にも並々な情熱があったことが思われる。

筆者はかねてから満州語文語の表現の多様性に関心を持ち、満文『詩経』の旧訳（1654年序）¹⁾と新訳（1768年序）を比較し、その結果の一部を公表した。²⁾そこで第一の特徴として指摘したことは、両者の翻訳に文体的な差異が見られる点であった。すなわち、旧訳は簡潔にして力強く、新訳は説明的で反語などの修辭的技巧が見られるということである。先には、時間的制約のため指摘するだけにとどまったが、新旧翻訳の比較による第二の特徴として挙げるべき点が、本稿で述べる押韻の表現である。

そもそも異なる音韻構造の言語で韻文を訳す場合、最も翻訳者を悩ませることが押韻の表現であろう。翻訳する言語の読者が読んで理解できるように意味を優先させることが普通であり、押韻の表現には全く注意しないことも稀ではない。反面、詩文は元来口頭で誦するものであるから、押韻のあるなしは韻文と散文の決定的な違いとも言え、原文の理解にあたってはながしるにしてよいものではない。このジレンマについて、『詩経』の満文翻訳者がどのように対処したかを述べるのが、本稿の目的である。

なお、『詩経』全三百五篇のうち、本稿では考察のまとまった国風百六十篇を分析の対象にした。小雅、大雅、頌については、後の考察によることとする。

2 満州語³⁾における押韻

まず、何をもって押韻と見なすかということが根本的な問題となる。語末音に限れば、満州語は漢語と違って音韻構造は比較的単純で、母音が六種あるほか、外来語と擬音語・擬態語以外の語彙については、鼻音 -n で終わる語があるだけである。声調の区別はなく、漢語の上古音・中古音のような多様な押韻組織にはならない。以下で検討する例では、語末の母音が同じというだけでなく、それに先立つ子音も繰り返される例が少なくないため、語末の CV を押韻することをもってより明確な押韻の表現と見なすことができよう。

満州語の基本語順は SOV なので、句の末尾には動詞または動詞の派生形態が来ることが多い（『詩経』の翻訳には、日本語の体言止めのような現象や、格助詞で終わる表現も見られるが、多くはない）。押韻の対象になる位置、すなわち各句の末尾は意味のうえでも切れ目になるので、文を終止できる不定形の -mbi や完了終止形 -habi / -hebi / -hobi、行為の継続を表す副動詞の -fi や仮定の意味を表す -ci などが現れるが、これらは同じ母音で終止するため、それを末尾の母音のみによる押韻と考えれば適切な語形を探すことは可能と見られる。もちろん意味が関わってくることから、それらの語形を自由にとれるわけではないが、機能語として用いられる補助動詞の bimbi（ある）、ombi（なる）、sembi（～と言う）を付加して文体を変えることは、新訳の場合多く見られ、適当な形態に変化させてこうした語を付加することも押韻を表現する手段のひとつと考える。新訳で改変をしている理由は、先に私見で述べた両訳の翻訳文体の差異によるものが多いが、それと共に本稿で見ると、押韻関係も配慮したからではないかというのが著者の考えである。

なお、こうした翻訳における押韻の表現は、その言語の本来の押韻様式とは必ずしも同じではないかも知れないが、翻訳ではない満州語の韻文における押韻との比較研究は今後の考察を待つことにする。

3 用例の分析

以下では、満文『詩経』が原文の押韻にどう対処しているかに基づき、次

のように分けて用例を挙げ、考察を行う。すなわち、①新旧共に押韻していない②旧訳が押韻せず新訳は押韻する③旧訳が押韻し新訳は押韻しない④新旧共に押韻する、の四種類である。さらに、最後に原文の押韻とは対応していないが、満州語の訳詞としてみた場合、一定のパターンの反復がリズムを生み出しているように思われる例を追加して指摘する。

はじめに、押韻していない例を以下に示す。音韻構造の異なる言語による翻訳では、押韻を表現しないということもひとつの方法であり、これは原文の意味を翻訳する側の言語により説明したものと見なすことができる。新訳では、こうした例は必ずしも多くはなく、国風全体では何らかの形で押韻に対応すると思われる表現が見られる。思うに新訳の訳者には、韻文を翻訳しているという意識があったためであろう。

なお、原文とその読み下し文は、石川(1997, 1998)に従う。

1-1 爰采唐矣 沫之郷矣 云誰之思 美孟姜矣 期我乎桑中 要我乎上宮

送我乎淇之上乎 (鄘風・桑中)

こゝ たう と 采る まい きやう 郷に こゝ たれ を か 之れ 思ふ うつくしき まうきやう よ われ きやうちゆう
 に 期せよ 我を 上 宮に 要めよ 我を 淇の上 に 送れよ

○旧訳

mailan gaici mei bade, we be gūnimbi seci, saikan meng giyang
 柏 取れば 沫 所に 誰 を 思うか と言え ば 美しい 孟 姜
 be, mimbe ts'ang jung de boljofi, šang gung de okdombi, ki šang de
 也 我を 桑 中 に 約束して 上 宮 に 迎える 淇 上 に
 fudembi,, 第1巻35a2-5

送る

○新訳

sirenehe mailan be guruci, mei ba -i gašan de bainu, we be gūnimbi
 ねなしかづら を 摘めば 沫 所の 村 に 求めよ 誰 を 思うか
 seci, saikan giyang halangga eyungge inu, mimbe sang jung ni
 と言え ば 美しい 姜 姓の 長女 也 我を 桑 中の
 bade boljofi, mimbe šang gung ni bade acanu, mimbe ki sui mukei
 所に 約束して 我に 上 宮 の 所で 会え 我を 淇 水 水の

bajargi de fudenu,, 第2巻23a5-b2

対岸 に 送れ

原文 唐・郷・姜・上：陽部

中・宮：侵部

旧訳 gaici, mei bade, giyang be, fudembi

boljofi, okdombi

新訳 guruci, bainu, eyungge inu, fudenu

boljofi, acanu

陽部に関しては、新訳の一部に命令形語尾の -nu と助動詞 inu による押韻を認められるかもしれないが、旧訳では押韻の工夫らしきものは見られない。ただし、侵部については、旧訳を -i による押韻と見ることはできる。

1-2 有女同車 顔如舜華 將翱將翔 佩玉瓊琚 彼美孟姜 洵美且都 (鄭風・有女同車)

女^{むすめ}有^あり 車^{くるま}を同^{おな}じくす 顔^{かほ}は舜^{しゅん}華^{くわ}の如^{ごと}し 將^はた翱^{かう}し將^はた翔^{しやう}す 佩^{はい}玉^{ぎよく}は瓊^{けい}琚^{きよ}
たり 彼^かの美^{うつく}しき孟^{まう}姜^{きやう} 洵^{まこと}に美^びにして且^かつ都^となり

○旧訳

emu sejen de bisire hehe, boco šun ilga adali, aššaci arbušaci, ashaha
同じ 車 に いる 女 色 舜 華 の如し 動けば振る舞えば帯びた
jaka gu tana, tere buyecuke meng giyang yargiyan -i saikan bime,
物 玉 真珠 かの 可愛い 孟 姜 誠 に麗しく て
yangsangga,, 第2巻6b7-7a1

美しい

○新訳

emu sejen de bisire hehe, boco mooyen ilha -i adali mujangga, aššaci
同じ 車 に いる 女 色 むくげの如しまさしく 動けば
arbušaci, ashaha gukiong gugioi absi yangsangga, tere buyecuke
振る舞えば 帯びた 輝ける玉 貴き玉 何と 美しい かの 可愛い
giyang halangga eyungge, yargiyan -i saikan bime fujurungga,,
姜 姓の 長女 誠 に麗しく て 上品な人
第3巻8a6-b2

原文 車・華・琚・都：魚部

翔・姜：陽部

旧訳 hehe, adali, tana, yasangga

arbušaci, giyang

新訳 hehe, mujangga, yangsangga, fujurungga

arbušaci, eyungge

この例でも、厳密には両部共に押韻表現は見られない。しかし、新訳は魚部の三ヶ所で -ngga を繰り返している。すなわち、旧訳が adali で終えている

ところに原文にない mujangga を加え、旧訳が tana で終えている箇所に yangsangga を置いているのは、末尾の furujungga と押韻させるためかもしれないが、最初の一箇所を欠くため部分的ではあるが押韻の工夫である可能性が考えられる。

次に、分類の二つ目は、旧訳は押韻しないが新訳は押韻する例である。これらは、新訳の翻訳者が改訳にあたり、文体面での叙述の改変と共に工夫をこらした部分と考える。

2-1 采苓采苓 首陽之巔 人之為言 苟亦無信 舍旃舍旃 苟亦無然 人之為言 胡得焉 (唐風・采苓)

苓れいをとり苓れいをとる 首陽しゅやうの巔いただきに 人ひとの言げんをなすや 苟かり亦もに信しんずるところ無なかれ 旃これをすてよ旃これをすてよ 苟かり亦もに然しかりとすること無なかれ 人ひとの言げんをなすや 胡なんぞ得うるところあらんや

○旧訳

mida^[マ] guruci seo yang alin -i antu, niyalmai arara gisun yargiyan
燕伏苗 摘むなら首 陽 山の南側 人の なす 言葉 誠
-i inu akdun akû, waliya waliya, yargiyan -i inu ararakû oci, niyalmai
にこれ 信 なし 棄てよ 棄てよ 誠 にこれ なさぬならば 人の
arara gisun, ai de bahambi,, 第2巻34a8-34b2

なす 言葉 何に 得るか

○新訳

jancuhûri orho gurumbi jancuhuri orho gurumbi, seo yang alin -i ninggude bi,
甘 草 摘む 甘 草 摘む 首陽 山のうえにあり
niyalmai banjibuha gisun, geli ai akdara babi, waliyaci acambi
人の 作った 言葉 また 何 信じる所あるか 棄てるべし
waliyaci acambi, unenggi urușerakû oci, niyalma aide bahafi gisun
棄てるべし 誠に 是となさぬなら 人 どうして 言葉
banjibumbi,, 第3巻44a2-6

作ることができるか

原文 苓・苓・巔・信：眞部

旃・旃・然・焉：元部

旧訳 guruci, antu, akdun akû

waliya, waliya, ararakû oci, bahambi

新訳 gurumbi, gurumbi, ninggude bi, akdara babi

acambi, acambi, urușerakû oci, banjibumbi

眞部については、旧訳で単に antu としている所を ninggude bi と変え、また同様に旧訳の akdun akû を akdara babi に変えることで、新訳では bi よる押韻を表現していると考え。元部でも、旧訳は押韻しないが、新訳は -i による押韻と見なせよう。

2-2 蔽蒂甘棠 勿翦勿敗 召伯所憩 (召南・甘棠)
蔽^{へいはい}蒂^{かんたう}たる甘棠は 翦^きる勿^なかれ敗^{そこな}ふ勿^なかれ 召^{せうはく}伯^{いこ}の憩^{いこ}ひし所^{ところ}

○旧訳

elbeme banjiha uli moo, ume asihiyara, ume bilara, šoo be
覆って成長したにわうめの木 刈り取るなかれ 折るなかれ 召 伯
teyehe bihe,, 第1巻10b5-6

休んでいた

○新訳

lasariname banjiha uli moo be, asihiyaci bilaci ojarahû
枝が茂り 成長したにわうめの木 を 刈り取るのは 切り取るのは不可なる
kai, šoo be ede teyehe bihe kai,, 第1巻11a3-4

ぞ 召 伯 ここで 休んでいた ぞ

原文 敗・憩：月部

旧訳 bulara, bihe

新訳 ojarahû kai, teyehe kai

押韻していない旧訳を、新訳は終助詞 kai を加えることにより押韻させていると見なせる。原文では助辞は押韻しないが、満州語訳で原文の押韻関係を何らかの形で表現しようとするれば、韻を踏む語彙を見出す以外には、終助詞によるのがひとつの手段であったのではないだろうか。⁴⁾

2-3 其釣維何 維絲伊緝 齋侯之子 平王之孫 (召南・何彼襍矣)

其^それ釣^つるは維^これ何^{なに}もてす 維^これ絲^し伊^い緝^{じつ} 齋^{せい}侯^{こう}の子^{むすめ} (のごとく) 平^{へい}王^{わう}の孫^{まご}
(のごとし)

○旧訳

tere welmiyeku aini baitalambi, sirge be siberefi sijin obumbi,
それ 釣り竿 何をもって 使う 糸 を 撚って釣り糸 なす
ci heo -i jui, ping wang ni omolo, 第1巻15b7-9

齋 侯 の 子 平 王 の 孫

○新訳

tere welmiyeku aini baitalambi seci, sirge be siberefi sijn
 それ 釣り竿 何をもって 使う と言えは糸 を 撚って 釣り糸
 oburengge inu, ci gurun -i heo -i jui, ping wang han -i omolo inu,,
 なすこと 也 齋 国 の 侯 の 子 平 王 汗 の 孫 也
 第1巻16a7-b2

原文 緝・孫：文部

旧訳 sijn obumbi, omolo

新訳 sijn obungge inu, omolo inu

新訳では、助動詞の inu を用いて、押韻箇所を示している。

2-4 標有梅 其實七兮 求我庶士 迨其吉兮 (召南・標有梅)

^{なげう}標 ^{うめあ}つに梅有^そり ^み其^なの實七^つなり ^{われ}我^{もと}を求^むるの^{しよし}庶士よ ^そ其^{きつ}の吉^{およ}に^べ迨

○旧訳

mei lasihifi terei tubihe nadan fali, mimbe feliyere yaya agu,
 梅 払って その 果実 七 個 我を 嫁に求める 諸々の 兄さん
 sain inenggi be amcacina,, 第1巻13a5-7

良い 日 を 求めなさい

○新訳

nenden ilha sihafi, terei tubihe nadan fali funcehebi, mimbe baihanjire
 梅の 花 散ってその 果実 七 個 余ったのだ 我を 訪ねて来る
 geren agu sa, sain inenggi be amcaci acambi,, 第1巻13b4-5

多くの 兄さん達 良い 日 を 求めるがよい

原文 七・吉：質部

旧訳 fali, amcina

新訳 funcehebi, acambi

新訳には bi による押韻が認められる。原文にない funcehebi を加えたことと、旧訳の勧誘を表す -cina を新訳で義務を表す -ci acambi にしているのも、訳者の解釈と共に押韻を表すためではないだろうか。

2-5 仲氏任只 其心塞淵 終温且惠 淑慎其身 先君之思 以勗寡人 (邶風・燕燕)

^{ちゆうしじん}仲氏任^は ^そ其^{こころまこと}の心^{ふか}塞^くに^{つひ}淵^{そん} ^か終^り温^いに^よして^{かつ}且^{けい}つ^し惠^{せん} ^よ淑^く其^みの^{つし}身^むを^{せん}慎^む ^{せん}先

君を之れ思へば 以て寡人を励けん

○旧訳

jung ši akdun bihe, terei mujilen gulu tondo, dubentele hūwaliyasun
仲 氏 信 あり その 心 純朴 正直 永く 温和に
bime fulehun, terei arbun mergen gingguji, nenehe ejen -i hiyoošun
して 恩恵ふかく 彼の 姿 賢者 敬淑の人 先の 主君 の 孝
be sitahûn beye de jombombihe,, 第1巻19a3-7
を 寡少なる 身 に 思い起こさせるでしように

○新訳

jung ši akdun bihe, terei mujilen gulu hing sehe, dubentele nemgiyen
仲 氏 信 あり その 心 純朴 懸命であった 永く 温和に
bime dahashûn, terei beye be olhošome sain obumbihe, nenehe
して 慎み深い 彼の 身 を 慎んで 良くなしたものだ 先の
ejen be gûni seme, sitahûn beye de jombumbihe,, 第2巻3b5-4a1
主君 を 思え と 寡少なる 身 に 思い起こさせるでしように

原文 淵・身・人：真部

旧訳 tondo, gingguji, jobombihe

新訳 hing sehe, obumbihe, jobumbihe

新訳は完了形語尾 -he による押韻と考えられる。sehe は擬態語に後続する動詞 sembi (～と言う) の派生形態であり、補助動詞としても使用される。また obumbihe も補助動詞としても使われる ombi (なる) の一形態である。共にここで敢えて加えているのは、説明的な文体にすると共に押韻のためと考えられる。⁹⁾

2-6 日居月諸 東方自出 父兮母兮 畜我不卒 胡能有定 報我不述 (邶風・日月)

日よ月よ 東方より出づ 父よ母よ 我を畜することを卒へず 胡ぞ能く定
しからん 我に報いること述ならず

○旧訳

šun biya dergi hošoci tucimbi, ama eme mimbe ujime duhembuhekû,
太陽 月 東の方より 出る 父 母 我を 養うこと 終わりにせず
ai toktoho babi, mini baru ijishûn akû,, 第1巻20a3-5
何 定った 所あるか 我に対して 従順ならず

○新訳

šun dere biya dere, dergi ergici tucirakúngge akú, ama kai eme kai
 太陽よ 月よ 東の方より 出ないこと なし 父よ 母よ
 mimbe ujime duhembuhekú, absi toktohon akú, minde karularangge
 我を 養うこと 終わらせず 何と 定まらないのか 我に 報いること
 ijishûn akú,, 第2巻4b6-5a1

従順 ならず

原文 出・卒・述：物部

旧訳 tucimbi, duhembuhekú, ijishûn akú

新訳 tucirakungge akú, duhembuhekú, ijishun akú

新訳において、最初の押韻箇所を原文にない二重否定表現とすることで後続の二ヶ所の否定形と押韻させているのが、新たな翻訳の際の工夫と考える。

2-7 睨睨黄鳥 載好其音 有子七人 莫慰母心 (邶風・凱風)

睨けんくわん睨くわうてうたる黄鳥すなわ 載そち其おとの音よを好よくす 子こ有あること七人しちにん 母心ぼしんを慰なぐさむる莫なし

○旧訳

gûli gali suwayan gasha mudan be saikan guwembi, jui nadan nofi
 ほうほけきょ 黄色の 鳥 声 を麗しく 鳴く 子 七 人
 bime, eniyei mujilen be surumburakú,, 第2巻22b1-3
 ありて 母の 心 を 慰めず

○新訳

gûli gûli sere gûlin cecike guwende, terei mudan be
 ほうほけきょ と 鳴く 小鳥 大いに鳴け その 声 を
 hono sain obure bade, jui nadan niyalma bimbime, eniyei mujilen be
 なお 良く する 所に 子 七 人 ありて 母の 心 を
 surumbujengge aide,, 第2巻7b5-7

慰めること 何によるか

原文 音・心：侵部

旧訳 guwembi, suruburakú

新訳 obure bade, surumbujengge aide

新訳では与位格の助詞-deによる押韻と見られる。前者では bade により逆接を表し、後者では aide により反語表現となる。いずれも原文には明確に表されていないが、新訳の訳者による解釈と押韻の工夫と見られる。

2-8 習習谷風 以陰以雨 出勉同心 不宜有怒 采葑采菲 無以下體 德音

莫違 及爾同死 (邶風・谷風)

習習たる谷風 以て陰り以て雨ふらす 出勉て心を同じくせば 有怒る宜
からず 葑を采り非を采るは 下體を以てする無し 德音の違ふ莫ければ
爾と死を同じうせん

○旧訳

ser sere hûwaliyasun edun, tulgun acabumbi, aga acabumbi, hacihiyame
そよと 穏やかな 風 曇りと なし 雨 なす 勉めて
murime emu mujilen ombi, jili banjici acarakû, fung guruci, fei guruci
強いて 同じ 心 なす 怒り 起こすべからず 葑 摘めば 菲 摘めば
fejergi beyebe tuwarakû, erdemu -i mudan ufaracun akû oci, sini
下の 体を見ず 徳の音 過失ない ならば あなた
emgi sasa bujembii,, 第1巻24a7-24b3

とともに 一緒に死ぬ

○新訳

ler ler sere banjibure edun de, tulhun acabumbi aga acabumbi kai,
そよそよと 生じさせる 風 に 曇りと なし 雨 なす ぞ
mujilen uhe oki seme kicere de, jili banjici acarakû kai, menji
心 共に ありたいと 勉めて 怒り 起こすべきでないぞ 蕪
be gurure hargi be gurure de, fejergi da be waliyarakû kai, erdemu
を 摘む 芥子菜を 摘む 時に 下の 根を 棄てるでないぞ 徳
mudan de ufaracun akû de, uthai sini emgi duhembuci ombikai,,
音 に 過失 ない 時には すなわち あなたとともに 終らせ られようぞ
第2巻9b7-10a4

原文 風・心：侵部

雨・怒：魚部

旧訳 edun, ombi

acabumbi, acarakû

新訳 edun de, kicere de

acabumbi kai, acarakû kai

非・違：微部

体・死：脂部

guruci, oci

tuwarakû, bujembii

gurure de, ufaracun akû de waliyarakû kai, ombikai

四ヶ所中旧訳は三ヶ所まで押韻していないが、新訳では -de または kai による押韻の表現と考える。ただし、原文の四種の韻の区別に正確に対応するところまではいっていない。

2-9 狐裘蒙戎 匪車不東 叔兮伯兮 靡所與同 (邶風・旄丘)

狐裘こきゆうの蒙もうじゆう戎じゆうたるは 匪かの車くるま 東あづませざればなり 叔しゆくや伯はくや 與とも同どうにする所ところ靡なし

○旧訳

dobihi jibca, ilhin tucike, sejen wesihun jihekúngge
 狐 毛皮の上着 なめし革 破れ出てしまった 車 東に 来なかったこと
 waka, šu hi, be hi emgi uhe ba akú,, 第1巻26b4-6
 ではない 叔 伯 と共に 全て 所なし

○新訳

dobihi jibca maname hamire, sejen dergi baru genehekúngge
 狐 毛皮の上着 破れんばかり 車 東に 行かなかったこと
 waka dere, mini deote mini ahúnta, uhe dakú akú dere,,
 ではない のだ 我が 弟たち 我が 兄たち 和合 しない のだ
 第2巻13a3-5

原文 戎・東・同：東部

旧訳 tucike, waka, ba akú

新訳 hamire, waka dere, dakú akú dere

新訳は動詞の未来形 -re による押韻のため、後続の二ヶ所に終助詞 dere を用いている。これも押韻を表すための工夫と見なせる。

2-10 瞻彼淇奥 緑竹猗猗 有匪君子 如切如磋 如琢如磨 瑟兮僊兮 赫兮咺兮 有匪君子 終不可諼兮 (衛風・淇奥)

彼の淇奥きおくを瞻みるに 緑りよく・竹ちく猗い猗いたり 匪ひたる君子くんしは 切せつしたるが如ごとく磋さしたるが如ごとく 琢たくしたるが如ごとく磨ましたるが如ごとし 瑟しつにして僊かん 赫くわくにして咺けん 匪ひたる君子くんし 終つひに諼わする可べからず

○旧訳

ki mukei dalin be hargašaci, niowanggiyan cuse moo niowarišambi,
 淇 水の 河岸 を 仰ぎ見れば 緑の 竹 青々としている
 šu bisire ambasa saisa faitara gese, mudure gese, foloro gese,
 ある 君 子 削る 如く 磨く 如く 彫る 如く
 nilara gese gelecuke horonggo eldengge yangsangga, šu bisire ambasa
 磨く 如し 恐ろしく 強く 立派で 美しい ある 君
 saisa be dubentele onggoci ojurakú,, 第1巻40a5-b1
 子 を 永らく 忘れることは できない

○新訳

tere ki šui mukei onggolo be tuwaci, niowanggiyan cuse moo ler ler
 彼の 淇 水 水の 前 を見れば 緑の 竹 青々
 sere gese, fujurunga ambasa saisa, faitara gese mudure gese,
 とする 如く 立派な 君 子 削る 如く 磨く 如く
 foloro gese nilara gese, fing sembime hing sembi, fir sembime
 彫る 如く 磨く 如し まじめに にして 懸命 であり 鷹揚にして
 hoo sembi, fujurunga ambasa saisa be, dubentele onggoci
 昂然と している 立派な 君 子 を 永らく 忘れることは
 ojarahû ohobi,, 第2巻30b2-7

できなかつたのだ

原文 猗・磋・磨：歌部

儻・咍・諉：元部

旧訳 niowarsambi, mudure gese, nilara gese

horonggo, yangsangga, onggoci ojarahû

新訳 ler ler sere gese, mudure gese, nilara gese

hing sembi, hoo sembi, ojarahû ohobi

新訳では、旧訳に一ヶ所欠けていた gese を補い、擬態語に続く動詞 sembi (～と言う) に合わせて否定詞のあとに補助動詞 ombi (なる) の完了終止形 ohobi を補うことにより、押韻関係を表していると考える。

2-11 叔于田 乘乘鵠 兩服齋首 兩驂如手 叔在藪 火烈具阜 叔馬慢忌

叔發罕忌 抑釋搆忌 抑鬯弓忌 (鄭風・大叔于田)

叔^{しゆく}于^{でん}田^にに^{ゆく} 乘^{じよう}乘^{ほう}鵠^のに^りて 兩^{りやう}服^{ふく}は^{くび}首^{そら}を^{そら}齋^へへ 兩^{りやう}驂^{さん}は^て手^{ごと}の^{しゆく}如^し 叔^{しゆく}藪^も
 に^あ在^ひり 火^{れつ}は^{とも}烈^とに^{さか}して^{さか}具^{しゆく}に^{うま}阜^{ゆる}なり 叔^{しゆく}や^{ちやう}馬^{ちやう}は^{ちやう}す^{ちやう}る^{ちやう}こと^{ちやう}慢^{ちやう}や^{ちやう}かに^{ちやう} 叔^{しゆく}や^{ちやう}ゆ^{ちやう}み^{ちやう}
 發^{はな}つ^まこと^ま罕^まなり 抑^こに^こ搆^{ひよう}を^と釋^とき 抑^こに^こ鬯^{ゆみ}を^{ちやう}鬯^{ちやう}す

○旧訳

šu aba tucici, duin fulan tohombi, be -i juwe morin uju teksin
 叔 狩に 出れば 四頭の 馬 つなぐ 横木の 二頭の 馬 首 整い
 šohadaha juwe morin meiren -i adali, šu luku de bi,
 さき引きした 二頭の 馬 肩 の 様 叔 茂った(所) にあり
 tuwai gûrgin sasa bederembi, šu -i morin elhe, šu -i gabtan
 火の 炎 共に 戻る 叔の 馬 ゆっくり 叔の 弓射ること
 nakambi, eici ladu neimbi, eici beri tebumbi,, 第2巻4a3-8
 止める あるいは 矢筒 開く あるいは 弓 収める

○新訳

šu abalame tucici, duin fulan tohombi, fara be aliha juwe morin
 叔 狩をしに 出れば 四頭の 青馬 つなぐ 轅を 受け止めた 二頭の 馬
 uju teksin bihebi, šohadaha juwe morin galai adali bihebi,
 首 整えて いた さき引きした 二頭の 馬 手の 様であった
 šu luku de bifi, tuwa -i gûrgin sasa badarambi šu -i morin
 叔 茂った(所) にあって 火の 炎 共に 大きくなる 叔の 馬
 elhei aliyambi, šu -i gabtan tongga bime goibumbi, tereci
 ゆっくりと 待つ 叔の 弓射ること 希 であるが 当たる そして
 ladu be neimbi, tereci beri be ucikalambi., 第3巻4b4-5a1
 矢筒を 開ける それから 弓を 鞘にはめる

原文 鵠・首・手・阜:幽部

慢・罕:元部

棚・弓:蒸部

旧訳 tohombi, teksin, adali, bederembi

elhe, nakambi

neimbi, tebumbi

新訳 tohombi, teksin bihebi, adali bihebi, badarambi aliyambi, goibumbi neimbi, ucikalambi

新訳では、幽部の二ヶ所に、bihebiを加えることで、また元部でもaliyambiを追加することにより旧訳が押韻していない箇所を補っていると見られる。

以上で見たように、新訳で押韻関係を表すような工夫を施していると考えられる例は少なくないが、この逆に旧訳の方ですでにそうした翻訳になっているにもかかわらず、新訳で敢えてこれを変えたため押韻対応が崩れている例もある。

3-1 殷其雷 在南山之陽 何斯違斯 莫敢或違 振振君子 歸哉歸哉 (召南・殷其雷)

^{いん} 殷^そたり^{らい}其^{なんざん}れ^{みなみ}雷^あ 南山^{なん}の^{とほ}陽^きに^{かな}在^ふり 何^いぞ^{とま}違^あき^{なん}かな 敢^{しん}へて^{しん}違^ん 或^んる^ん莫^んし 振^ん振^ん 君^ん子^んよ 歸^んらん^ん哉^ん 歸^んらん^ん哉

○旧訳

akjan kunggur seme, julergi alin -i antu de bi, ere ainu ereci
 雷 ごろごろと 南 山の 南側に あり これ 何故 これより
 delhefi, majige jabduci ojarahûni, wesihun sain ambasa saisa
 分かれて いささか 暇を得る ことができぬか 貴い 良い 君 子
 jicina., 第1巻12b1-4

来てほしい

○新訳

kunggur sere akjan, julergi alin -i antu de biheni, ere ainu ereci
 ごろごろ と 鳴る 雷 南山の南側にあったか これ 何故 これより
 delhefi, majige jabduci ojarahûni, wesihun wesihun ambasa saisa,
 分かれて いささか 暇を得る ことができぬか 貴い 貴い 君 子
 amasi jikini amasi jikini,, 第1巻13a1-3

戻って来てほしい戻って来てほしい

原文 陽・違：陽部 子・哉：之部

旧訳 antu de bi, ojarahûni saisa, jicina

新訳 antu de biheni, ojarahûni saisa, jikini

旧訳は -i と -a により二種とも対応するが、新訳は後者をひとつ -kini に変えているため、押韻が破れている。

3-2 燕燕于飛 差池其羽 之子于歸 遠送于野 瞻望弗及 泣涕如雨 (邶風・燕燕)

つばめ ここ と 飛び ああも はね たつ こ の こ こ こ とつ とほく 野 おく せんぼう
 燕燕よ子に飛び 差其の羽を池つ 之の子子に歸ぐ 遠く野に送る 瞻望す
 れども及ばず 泣涕すること雨の如し

○旧訳

cibin cibin deyeci, juwe asha debderšembi, ere gege geneci bigan de
 燕 燕 飛べば ふたつの 羽 しきりに羽ばたく この 姐さん 行けば 野 に
 goro fudembi, hargašame tuwaci saburakû, yasai muke agara adali tuhembi,,
 遠く 見送る 仰ぎ 見ても 見えず 涙 雨降る 如く 落ちる
 第1巻18b1-4

○新訳

cibin cibin deyeci, julergi amala debsitembi ere gege genembikai, bigan
 燕 燕 飛べば 前 後 羽ばたく この 姐さん 行くよ 野
 de goro fudenembi, konggohon -i tuwafi saburakû de, yasai muke
 に 遠く 送って行く ひたすら 見て 見られずに 涙
 agara adali tuhembi,, 第2巻3a3-5

雨降る 如く 落ちる

原文 飛・帰：微部 羽・野・雨：魚部

旧訳 deyeci, geneci debderšembi, fudembi, tuhembi

新訳 deyeci, genembikai debsitembi, judenembi, tuhembi

新訳は、微部の -ci を -mbikai に取って変えることで、押韻関係を崩している。

3-3 左手執籥 右手秉翟 赫如渥赭 公言錫爵 (邶風・簡兮)

^{ひだりて}左手に^{やく}籥を^と執り ^{みぎて}右手に^{てき}翟を^と秉り ^{あか}赫^{あくしや}き^{ごと}こと^{ごと}渥^{こう}赭^{こう}の^{しやく}如^{たまは}し 公に言に爵を錫

る

○旧訳

hashû gala ficakû seferembi, ici gala dethe jafambi, duksefi nei tucime
左 手 籥を 手に取る 右 手 羽をつかむ 赤面し汗 出て
fularambi, gung ni gisun nure bumbi,, 第1巻27b9-28a2

赤らめる 公 の 言葉 酒を 与える

○新訳

hashû gala ficekû jafambime ici gala dethe tukiye^{mbi}, fur seme
左 手 籥を 手に取って 右 手 羽を 持ち上げるてかてかと
fularjambime, gung ni gisun nure şangna sembi,, 第2巻14a4-6
顔を赤らめて 公 の 言葉 酒を 賞賜せよ と言う

原文 籥・翟・爵：葉部

旧訳 seferembi, jafambi, bumbi

新訳 jafambime, tukiye^{mbi}, sembi

新訳では、副動詞 -me に変えることで -mbi の繰り返しを破っている。ただし、後述のように -me, -mbi, -me, -mbi という副動詞と定動詞の繰り返しでリズムを取っていると見ることできる。

3-4 折柳樊圃 狂夫瞿瞿 不能辰夜 不夙則莫 (齊風・東方未明)

^{やなぎ}柳を^を折りて^ほ圃に^{かき}樊^{きやうふ}せば ^{くく}狂^{しんや}夫^{わきま}も^{はや}瞿^{すなは}瞿^{おそ}たり 辰^{はや}夜^{すなは}を^{おそ}能^{おそ}へず 夙^{おそ}から^{おそ}ざれ^{おそ}則^{おそ}ち

莫し

○旧訳

burga bilafi yafan kûwaraci, mentuhun haha hoilacame tuwaşatambi,
柳の枝 折って 圃 取り 囲めば 愚かな 男 周囲を見渡し 遠慮する
inenggi dobori be sarkû oci, erde waka oci yamji ombi,,
昼 夜 を 知らぬ ならば 未明に 非ずば 晩 なる

第2巻16a7-b3

○新訳

burga bilafi yafan jafaci, mentuhun haha hono bekte bekte tuwakiyambi,
 柳の枝折って 園手に取れば 愚かな男 なお 躊躇して 弁える
 inenggi dobori be ilgame muterakû de, erde waka oci uthai
 昼 夜 を 区別することができない時 未明に 非ず ば すなわち
 sitabumbi,, 第3巻20b3-7

遅れる

原文 圃・瞿：魚部

夜・莫：鐸部

旧訳 kûwaci, tuwašatambi

sarkû oci, ombi

新訳 jafaci, tuwakiyambi

muterakû de, sitabumbi

新訳では、条件を表す -ci を与位格助詞 de を用いた表現に変えて、-i による押韻関係を破っている。

以下は、新旧共に押韻していると見なされるものである。

4-1 言告師氏 言告言歸 薄汗我私 薄澣我衣 害澣害否 歸寧父母 (周南・葛覃)

言に師氏に告げ 言に告げ言に歸がん 薄に我が私を汗ひ 薄に我が衣を澣
 はん 害をか澣ひ害をか否ざらん 歸ぎて父母を寧んぜん

○旧訳

ši si de gisun henduki, hendure gisun dancan de genere be ala, mini
 師氏に言葉 語ろう 語る 言葉 実家 に行くことを告げよ 我が
 ajige etuku be majige obo, amba etuku be majige dasata, ya be
 小さい 着物を いくらか 洗い 大きな 着物を いくらか 誂えよ 何を
 dasatambi, ya be nakambi, ama eme be tuwaname genembi,,
 誂えるか 何を止すか 父 母 を訪ねて行くために 行く
 第1巻2a6-9

○新訳

hehe sefu de gisun henduki sembi, hendure gisun dancan de geneki mini
 女 師匠に言葉 語ろう と言う 語る 言葉 実家 に行こう 我が
 dorgi etuku be majige obuki, mini oilorgi etuku be majige dasataki,
 内の 着物を 少し なそう 我が 上の 着物を 少し 誂えよう
 ya be dasatambini ya be nakambini, ama eme be tuwaname
 何を 誂えるか 何を 止すか 父 母 を訪ねて行くために

geneki,, 第1巻2b2-5

行こう

原文 婦・衣：微部

否・母：之部

旧訳 ala, dasata

nakambi, genembi

新訳 geneki, dasataki

nakambini, geneki

原文の二種類に対応し、旧訳は -a と -mbi により、新訳は -ki と -i により押韻していると見なせる。

4-2 南有樛木 葛藟纒之 樂只君子 福履綏之 (周南・樛木)

みなみ きうぼくあ 南に樛木有り かつるいまと 葛藟纒へり たのし 樂只める くんし 君子 ふくり やす 福履を綏んず

○旧訳

julergi lasari moo de hūša siren fasimbi, buyecuke ambasa saisa

南 枝の茂った木にかずら糸ぶら下がる愛すべき君子

de, hūturi fengšen isimbi,, 第1巻3a7-9

に 福 徳 得る

○新訳

julergi lasari moo de, hūša siren sirenembi, saišacuka ambasa saisa

南 枝の茂った木にかずら糸連なる愛すべき君子

de, hūturi fengšen isimbi,, 第1巻3b5-6

に 福 徳 得る

原文 藟・綏：微部

旧訳 fasimbi, isimbi

新訳 sirenembi, isimbi

-mbi としては両方とも押韻しているが、-simbi としてみると旧訳のほうが整っている。この逆が次の例である。

4-3 螽斯羽 薨薨兮 宜爾子孫 繩繩兮 (周南・螽斯)

しゅうし はね こうこう 螽斯の羽 薨薨たり なんじ しそん よろ 爾の子孫に宜しく じょうじょう 繩繩たり

○旧訳

seksehe⁹⁾ -i asha der sembi, sini juse omosi giyan -i madambi,,

蝗 の 羽 ざわっと鳴る 汝の 子 孫 宜しく 殖える

第1巻4a2-3

○新訳

sebsehe -i asha, dur dur sembi, sini juse omosi, ter ter seme fusembi,,

蝗 の 羽 ざわざわと鳴る 汝の 子 孫 ぞろぞろと 殖える

第1巻4a7-b1

原文 蕤・緹：蒸部

旧訳 sembi, madambi

新訳 sembi, fusembi

こちらでは、新訳の方が (-) sembiとして、より整っている。ただし、同じ篇でも次の句では、以下のように旧訳の方が整っている。

4-4 螽斯羽 揖揖兮 宜爾子孫 蟄蟄兮 (周南・螽斯)

螽斯の^{しゅうし}羽^{はね} 揖^{しゅしゅ}揖^{しゅ}たり 爾^{なんぢ}の子^し孫^{そん}に^{よろ}宜^{よろ}しく 蟄^{しゅしゅ}蟄^{しゅ}たり

○旧訳

seksehe -i asha sor sembi, sini juse omosi giyan -i fusembi,,

蝗 の 羽 ざっと鳴る 汝の 子 孫 宜しく 殖える

第1巻4a4-5

○新訳

sebsehe -i asha, sor sor sembi, sini juse omosi, lar lar seme badarambi,,

蝗 の 羽 ざざっと鳴る 汝の 子 孫 うんと 広がる

第1巻4b2-3

原文 揖・蟄：緝部

旧訳 sembi, fusembi

新訳 sembi, badambi

同じ篇だが、旧訳の sembi, fusembi を新訳では踏襲せず、敢えて sembi, badambi としている。これにより翻訳者の押韻表現に対する姿勢が見て取れる。すなわち、前の連で fusembi を使ってしまったので、「蟄蟄」の翻訳を優先させ、押韻への考慮は二の次になっている。内容（意味）と形式（押韻）の両立の限界と言える。

次は両方とも押韻しているが、新訳の方に工夫が見られる。

4-5 桃之夭夭 灼灼其華 之子于歸 宜其室家 (周南・桃夭)

桃^{もも}の^{えうえう}夭^{えう}夭^{えう}たる 灼^{しやく}灼^{しやく}たり其^もの^{はな}華^{はな} 之^この^こ子^こ子^こに^{とつ}歸^{とつ}ぐ 其^もの^{しつか}室^{しつか}家^やに^{よろ}宜^{よろ}しからん

○旧訳

toro moo niowari niori, terei ilga šari siri, ere gege be sadulaci,
 桃 木 鮮やかに その花 ぱっと この姐さんを嫁取りすれば
 boo boigon be acabumbi,, 第1巻4a8-b1
 家 家族 に ふさわしい

○新訳

toro moo niowari niofari, terei ilha šari šari, ere gege be buhe de,
 桃 木 鮮やかに その花 ぱっと この姐さんを嫁にもらったなら
 terei boo boigon de acaburi,, 第1巻4b5-6
 その家 家族 に ふさわしい

原文 蓁・人：真部

旧訳 šari siri, acambi

新訳 šari šari, acaburi⁷⁾

旧訳は -i により新訳は -ri によるが、新訳の方が語末の CV までそろえ、より整った形式になっている。

4-6 桃之夭夭 其葉蓁蓁 之子于歸 宜其家人 (周南・桃夭)
 桃の夭夭たる 其の葉蓁蓁たり 之の子子に歸ぐ 其の家人に宜しからん

○旧訳

toro moo niowari niori, terei abdaha jergi jergi, ere gege be
 桃 木 鮮やかに その葉 幾重にも この姐さんを
 sadulaci, boigon -i niyalma be acabumbi,, 第1巻4b5-7
 嫁取りすれば 家族 の 人 に ふさわしい

○新訳

toro moo niowari niowari, terei abdaha jergi jergi, ere gege be
 桃 木 鮮やかに その葉 幾重にも この姐さんを
 buhe de, terei boo -i niyalma de acabungga ergi,, 第1巻5a2-3
 嫁にもらったら その家の 人 に ふさわしい方

原文 華・家：魚部

旧訳 jergi jergi, acabumbi

新訳 jergi jergi, acabungga ergi

この例も上記と同様に、旧訳は単に -i によるが、新訳は -ergi による押韻と見なせ、より整っている。特に新訳の最後の ergi は、原文に相当する語が

なく、acabunga で終えることも可能と思われるが、敢えて押韻表現のために付加したと考えられる。

4-7 肅肅兔置 椽之丁丁 赳赳武夫 公侯干城 (周南・兔置)
しゅくしゅく としや これ う たうたう きうきう ぶふ こうこう かんじやう
肅 肅たる兔置 之を椽つことを丁丁 赳赳たる武夫は 公侯の干城

○旧訳

gûlmahûn -i asu akdun cira, hadaha -i jilgan cang cing sembi,
兔 の 網 丈夫で しっかり 轡 の 音 カーンコーンと鳴る
mangga hûsungge coohai haha, gung heo -i kalka hecen ombi,,
屈強な 勇ましい 武 士 公 侯 の 盾 城 となる
第1巻5a1-3

○新訳

gûlmahun -i algan cira cira, hadaha -i jilgan cang cing sembi,
兔 の 網 しっかり しっかり 轡 の 音 カーンコーンと鳴る
hoo hoo sere coohai haha, gung heo -i kalkan hecen ombi,^[マ]
昂 然 と 武 士 公 侯 の 盾 城 となる
第1巻5a5-6

原文 置・夫：魚部 丁・城：耕部

旧訳 akdun cira, haha sembi, ombi

新訳 cira cira, haha sembi, ombi

両者とも、原文のふたつの部に -a と -mbi により対応している。

4-8 百爾君子 不知德行 不伎不求 何用不臧 (邶風・雄雉)
ひやくじ くんし とくかう し そこな むさぼ なん もち よ
百爾の君子 德行を知らざらんや 伎はず求らず 何ぞ用て臧かざらん

○旧訳

yaya ambasa saisa erdemu yabun be sarkû, oshon akû, dosi akû oci,
全ての 君 子 徳 行い を 知らず 暴虐ならず 貧ら ざれば
ai baita de sain akû,, 第1巻23a5-7

何 事 に 良からず

○新訳

yaya ambasa saisa tere⁸⁾, erdemu yabun be sambidere, silhidarakû
全ての 君 子 よ 徳 行い を 知るだろう 恨まず

gamjidarakû oci, aide ucaraci sain akû sere,, 第2巻8b3-5

食欲でない ならば 何に 出会えば 良からず と言うべきか

原文 行・臧：陽部

旧訳 sarkû, sain akû

新訳 sambidere, sain akû sere

-kûと-reによる押韻と見られる。新訳では、終助詞dereと押韻させるためにsembiが未来形接辞の-reを取ったものとする。

最後に、原文の押韻とは異なるが、満州語として見たとき、パターンの繰り返しで、ある種のリズム感を表しているように思われる例をいくつか挙げる。これらが実際にそうした機能を持っていたかは、満州語固有の韻文と比較してみなければならぬことは言うまでもない。

5-1 于以采蘋 南澗之濱 于以采藻 于彼行潦 (召南・采蘋)

于以に蘋を采る 南澗の濱に 于以に藻を采る 彼の行潦に

○旧訳

pin gurure de, julergi holoi cikin, dzoo gururede, bisan mukei jurgan,,

蘋 採る に 南 谷の 川辺 藻 採るに 出水 水の 筋

第1巻10a3-4

○新訳

pinggari be guruci, julergi holoi cikin de sokji be guruci, bisan mukei

蘋 を採るなら 南の 谷の 川辺に 藻草を採るなら 出水 水の

jurgan de,, 第1巻10a7-8

筋 に

原文 蘋・濱：真部

藻・潦：宵部

旧訳 gurure de, cikin

gurun de, jurgan

新訳 guruci, cikin de

guruci, jurgan de

両方とも原文とは対応していないが、deと-n及び-ciと-n deの繰り返しとなっており、リズム感を持たせているように受け取られる。

5-2 我思肥泉 茲之永嘆 思須與漕 我心悠悠 駕言出遊 以寫我憂 (邶風・泉水)

我れ肥泉を思い 茲く永嘆す 須と漕とを思い 我が心 悠悠たり 駕して

言ことに出遊しゅついうし 以もつて我わが憂うれひを寫のぞかん

○旧訳

bi, fei ciowan be gûnici, uthai golmin sejilembi, sioi dzoo be gûnici,
我 肥 泉 を 思えば すなわち 長く 嘆く 須 漕 を 思えば
mini mujilen wajirakû, tubade tucifi yabume, mini jobocun be wacihiyaki,,
我が 心 尽きず そこへ 出て 行き 我が 憂い を 終えたい
第1巻29a5-8

○新訳

bi fei ciowan muke be gûnime, uthai golmin sejilembi, sioi -i ba, ts'oo
我 肥 泉 水 を 思い すなわち 長く 嘆く 須 の 所 漕
-i ba be gûnime, mini mujilen cik cik sembi, tubade tucifi yabume
の 所 を 思い 我が 心 鬱々とする そこへ 出て 行き
mini jobocun be subuki sembi,, 第2巻16a1-4

我が 憂い を 解きたい と言う

原文 泉・嘆：元部

漕・悠・遊・憂：幽部

旧訳 gûnici, sejilembi

gûnici, wajirakû, yabume, wacihiyaki

新訳 gûnime, sejilembi

gunime, sembi, yabume, sembi

新訳で -me と -mbi の繰り返しのリズムか。

5-3 無田甫田 維莠驕驕 無思遠人 勞心切切 (齊風・甫田)

甫田ほでんに 田たつくる 無なかれ 維これ 莠いうけうけう驕けう驕けうたり 遠人えんじんを 思おもふ 無なかれ 勞心らうしんたうたう切切けうけうたり

○旧訳

ume usin be badarame weilere, hara canggi etenggi ombi,
決して 田 を 広げ 働くなかれ エノコログサ だけ 強くなる
ume goroki niyalma be gûnire, mujilen suilame jobocun ombi,,
決して 遠方 人 を 思うな 心 苦しみ 憂鬱になる
第2巻17b5-7

○新訳

ume usin be cingkai badarambume weilere, fik fik seme hara
決して 田 を はるかに 広げて 働くなかれ びっしりと エノコログサ
muterahû, ume goroki niyalma be gûnire, cik cik seme mujilen
なるのではないか 決して 遠方 人 を 思うな 鬱々と 心

joborahû,, 第3巻22a5-7

悩ますのではないか

原文 田・驕・人：真部

切：宵部

旧訳 weilere, ombi, gûnire

ombi

新訳 weilere, muterahû, gûnire

joborahû

旧訳では -re, ombi により, 新訳では -re, -rahû の繰り返しになっている。

5-4 胡為乎株林 從夏南 匪適株林 從夏南 (陳風・株林)

株林に胡為るぞ 夏南に従ふて 株林に適きて 夏南に従ふに匪ず

○旧訳

ju lin de ai turgun ni, hiya nan be tuwanambi, ju lin de generengge

株林に何の理由か 夏南を訪ねて行く 株林に行くこと

waka, hiya nan be tuwanambi,, 第2巻47a5-7

に非ず 夏南を訪ねて行く

○新訳

ju lin bade ai baita bini, hiya nan be tuwanarangge kai, ju lin bade

株林所に何のことあろうか 夏南を訪ねて行くことぞ 株林の所に

generengge waka ni, hiya nan be tuwanarangge kai,, 第3巻61b1-3

行くことに非ずや 夏南を訪ねて行くことぞ

原文 林・南・林・南：侵部

旧訳 turgun ni, tuwanambi, waka, tuwanambi

新訳 baita bini, tuwanarangge kai, waka ni, tuwanarangge kai

押韻には合っていないが, 新訳では -ni と tuwanarangge kai の繰り返しにより, 原文の持っている繰り返しのリズムを表現しているように思われる。

旧訳はそれほど整っていない。

4 おわりに

何度か触れているが, 翻訳の第一の目的は意味の伝達にあり, いわば記号内容の処理であって, 形式である音声への対応は二義的にならざるを得ない。それでも, 新訳の翻訳者はこれまでに見たように, さまざまな語彙の選択によって原文の持つ押韻関係を訳詩にも反映させようとしたのではないかと推測できる。それがどの程度の効果をあげ得たかは, この言語を母語としないものにはなんとも評価の仕様がなないことは残念であるが, 訳者の意図は見て

取れる気がする。

これまで見た押韻をしていると思われる例を、押韻部分に基づいて列挙する。(例番号の後の「旧」は旧訳、「新」は新訳を表す)

- a : saisa, jicina 3-1旧; ala, dasata 4-1旧; cira, haha 4-7旧, 4-7新
- bi: gurumbi, gurumbi, ninggude bi, akdara babi 2-1新; funcehebi, acambi 2-5新; hing sembi, hoo sembi, ojorakû ohobi 2-10新; tohombi, teksin bihebi, adali bihebi, bederembi 2-11新
- ci : deyeci, geneci 3-2旧
- de: obure bade, surumbujengge aide 2-5新; edun de, kicere de, gurure de, ufaracun akû de; 2-8新
- ergi: jergi jergi, acabunga ergi 4-6新
- gese: ler ler sere gese, mudure gese, nilara gese 2-10新
- he: hing sehe, obumbihe, jobumbihe 2-5新
- i : boljofi, okdombi 1-1; acambi, acambi, urușerakû oci, banjibumbi 2-1新; antu de bi, ojorakûni 3-1旧; kûwaci, tuwașatambi 3-4旧; jafaci, tuwakiyambi 3-4新; dobori, ombi 3-4旧; nakambini, geneki 4-1新; șari siri, acambi 4-5旧; jergi jergi, acabumbi 4-6旧
- inu: sijin obungge inu, omolo inu 2-2新
- isimbi: fasimbi, isimbi 4-2旧
- kai: ojorakû kai, teyehe kai 2-2新; acabumbi kai, acarakû kai, waliyarakû kai, ombikai 2-8新
- ki: geneki, dasataki 4-1新
- ku: tucirakûngge akû, duhembuhekû, ijishûn akû 2-3新; sarkû, sain akû 4-8旧
- mbi: aliyambi, goibumbi/neimbi, ucikalambi 2-11新; debderșembi, fudembi, tuhembu 3-2旧; debsitembi, judenembi, tuhembu 3-2新; seferembi, jafambi, bumbi 3-3旧; nakambi, genembi 4-1旧; sirenembi, isimbi 4-2新; sembi, madambi 4-3旧; sembi, badambi 4-4; sembi, ombi 4-7旧, 4-7新
- ni: antu de biheni, ojorakûni 3-1新
- ngga: mujangga, yangsangga, fujurungga 1-2新 (部分?)
- nu: bainu, eyungge inu, fudenu 1-1新 (部分?)

-re: sambidere, sain akû sere 4-8新; hamire, waka dere, dakû akû dere
2-9新

-ri: šari šari, acaburi 4-5新

-sembi: sembi, fusembi 4-3新, 4-4||

定動詞形の -mbi が多いほか (-bi 及び -i としての押韻もこの形態を含みうる), それに次いで多い -i の例には -ci, -fi, -ki, -ni などの動詞に付く接辞が含まれることから、押韻位置となる句の末尾には、満州語の基本語順に従って動詞が置かれるのが多いことが分かる。この他、-ci, -he, -isimbi, -ki, -ni, -re -sembi の例は動詞または動詞接辞の付いた形態である。これに対して、-ergi は名詞、-ngga は形容詞、gese, -kû は副詞、inu は助動詞、-de, kai は助詞である。また、母音の分布から見ると、o による押韻だけがないが、たまたまその母音を持つ語が訳語に現れなかっただけに過ぎない。

次に、新訳で押韻させる工夫を概観する。

動詞(-)bi (あり) を加える : 2-1, 2-4, 2-10, 2-11

終助詞 kai を加える : 2-2, 2-8

格助詞 de を加える : 2-7, 2-8

助動詞 inu を加える : 2-3

命令形を -ci acambi (～すべし) に変える : 2-4

完了進行形 -mbihe を用いる : 2-5

二重否定形 -kúngge akû を導入する : 2-6

終助詞 dere を加える : 2-9

副詞 gese を加える : 2-10

概して機能語を用いることにより、意味にあまり干渉しないように配慮していることがうかがわれる。

旧訳は、その文体の簡潔さゆえ素朴な力強さを感じさせるが、未だ押韻にまで配慮するにはいたっていない。新訳は、言葉多く説明的で反語や二重否定など修辭的な技巧を用いることに加え、押韻への対応も試みているように思われる。卑見によれば、ふたつの翻訳の文体の差は、ちょうど我が国の『万葉集』と『古今和歌集』のそれにあたり、素朴さから技巧へという、ある言語が韻文を表記するうえでたどる時間的变化として共通する面があるよ

うに思われる。これは、満州語という言語が、一世紀を経るうちに漢語・漢文との接触を通じて、韻文を表記する言語として成熟していった軌跡とも考えられる。

注

- 1) 韓国ソウル大学の成百仁教授のご指摘によれば、順治年間の序を持つ旧訳には異本があるとのことだが、筆者未見である。
- 2) 1999年8月10日北京で行われた、第2回国際満学研究会での筆者の発表「關於満文詩經新旧翻訳之比較」を指す。2000年刊行の『満学研究』第五・六輯に掲載の予定である。
- 3) 小論では満州語文語を指す。
- 4) 次の例でも、旧訳と異なり新訳は kai を挿入しているが、ここでは新訳の kai は原文の「兮」に相当すると思われる。

緑兮絲兮 女所治兮 我思古人 俾無訖兮 (邶風・緑衣)
みどり いと はんち つむぎ ところ われ こじん おも とが な
緑の絲よ 女の治し所 我古人を思ひ 訖無からしめん

○旧訳

niyoboro subeliyen be si tuttu dasaci, bi julgei niyalma
濃緑の 練り糸 を 汝 あのように 整えるならば 我 昔の 人
be gūnifi endebuku obuki,, 第1巻18a2-4
を 思い 過ちを なそう

○新訳

nioboro kai subeliyen kai, si tuttu dasambi kai, bi julgei niyalma
濃緑 ぞ 練り糸 ぞ 汝 あのように 整える ぞ 我 昔の 人
be gūnici endebuku akū obuki sembi kai,, 第2巻2b4-5
を 思えば 過ち なし と なしたい と言う ぞ

原文 糸・治・訖: 之部

旧訳 subeliyen be, dasaci, obuki

新訳 subeliyen kai, dasambi kai, sembi kai

旧訳の niyoboro は nioboro の異綴りと考える。また、最後の endebuku obuki には否定辞 akū が抜けている。

- 5) 同じ篇の前の連までは旧訳の方が押韻しているが、この連ではその逆になっている。
- 6) seksehe は sebsehe の誤りであろう。seksehe は後頭部の骨の意味である。
- 7) 動詞語尾の -ri は果たして他に例があるか、筆者未見である。あるいは、韻文特有の形式かも知れない。
- 8) dere の点が欠けたものであろう。

参考文献

- 石川忠久 (1997) 『詩経 (上)』 明治書院, 東京
—— (1998) 『詩経 (中)』 明治書院, 東京